



FUTURE CENTER NEWS

フューチャーセンター通信 2014.08.23 vol.8
2014年09月30日発行号

ぎふフューチャーセンター(岐阜大学の「地(知)の拠点整備事業」における取組みの一つ)は、大学、地域、自治体がともに地域の課題を探り、未来に向かって新しい価値をつくる対話の場です。今年度の第5回目は、岐阜大学応用生物科学部で開講されている「荘川公民館大学」の一環で、学生、教職員、地域の皆さんを交えながらフューチャーセンターを開催しました。

Check!



地域の自然を考える未来への対話

今後の活動や調査へ活かす

8月23日(土)に高山市荘川町にある荘川総合センター文化ホールにて、ぎふフューチャーセンターを開催しました。今回のフューチャーセンターでは、伊藤栄一地域コーディネーター(岐阜大学地域協学センター)による進行のもと、21人の参加者がグループに分かれて対話を行いました。はじめに、自分にとっての身近な自然を参加者同士で話しました。「きれいな水」「里山」「おいしい野草」「雪」「野生動物」「荘川桜」「尾上郷の大イワナ」など様々な自然があげられました。次に、荘川の自然をどのようにしていけばよいかを対話したところ、「自然と共存していきたい」「必要に応じて手をかける」「地域外に住んでいる人に荘川の自然を知ってもらう」など、自然を保全し活用する意見がありました。最後に、グループで対話した内容を発表し、参加者全員で意見を共有しました。今回のフューチャーセンターで提案された意見やアイデアが、今後の研究、調査、保全活動に役立てられることが期待されます。

対話の中で出てきた意見やアイデア

「(荘川の)自然とは」

- 景色を楽しむなど、五感で変化を感じることができる。
- 川の氾濫や土砂崩れなど自然災害を引き起こす面もある。
- 山菜、里山、植林地、清水などが利用できるものである。 ● 観光資源になりうる。
- 遊び場、知識探究の場、いやしの場など様々な役割があり、自然が身近に感じられる。
- きれいな水があり、自然が豊かである。(冬は雪があり、夏は涼しく、川と親しめる。)

「どのようにすればよいか」

- 自然と共存していきたい。
- 必要に応じて自然に手をかけるが、手をかけ過ぎない。 ● ミズバショウを保全する。
- 保全のためにシカ、イノシシを駆除することもある。ジビエとしての利用も考える。
- 他地域に住んでいる人に対し、荘川の現状を知ってもらう。



岐阜大学

CCSC

地域協学センター

Center for Collaborative Study with Community



荘川公民館大学と ミズバショウの植栽

風土保全教育プログラムの一つである荘川公民館大学は、平成16年度より岐阜大学応用生物科学部(平成18年度まで地域科学部と共同)で開講されている講義です。地元の公民館を勉学の間として活用しながら、郷土史、現地での実地体験や聞き取り等を通じて、地域が育んできた風土について理解し、学びます。

今年度の公民館大学では、ミズバショウの苗を植栽する企画に受講生と教職員も参加しました。植栽前に安藤正規助教からミズバショウの食害被害の調査や保全活動について講義がありました。山中峠には、かつてミズバショウがたくさん咲いていましたが、一時期にはほとんどのミズバショウが野生動物による深刻な食害を受けました。そこで飛騨森林管理署、高山市、地元町内会、岐阜大学の4団体が連携し、山中峠のミズバショウの保全にむけ、これまで活動を行ってきました。今回の公民館大学では受講生がこのミズバショウの保全活動に参加し、食害の被害や保全の植栽活動などの取り組みについて学びました。



安藤先生による講義の様子



↑ 植栽前の講義会場



↑ ミズバショウの花



シカによる食害



被害にあったミズバショウ



地元と取り組んだ植栽活動の様子

※写真提供/応用生物科学部 安藤正規助教